

106 「海外旅行の思い出（3）」

（21）中国・ベトナム[2009.01.10～01.021]

全日空のマイレージを海外航空券（東京～広州 往復）に交換。これまで国内航空券に交換したことはあったが、海外航空券にしたのは初めて。今年1月末に定年退職を迎えるので、余った有給休暇を使う。病気等で長い期間休まざるを得ないときのため、有給休暇はできるだけ多く残しておくのが安心である。しかし、有給休暇は退職と同時に無効になるので、多くの人は退職直前に残った有給休暇を使う。

私の有給休暇は1ヶ月近く残っていたが、仕事との関係で12日間の休みを取った。

今回は、12日間で広州から雲南省、ベトナムまで行く予定。

ルートは、東京→広州→昆明→麗江→昆明→ハノイ→広州→東京 に決めた。

- ① 広州では、市のほぼ中央 流花路に面した同人賓館というホテルに泊まった。

ホテルから歩ける範囲に、西漢南越王墓博物館、中山記念堂、六榕寺、広州博物館、広東省博物館などがあり、歩きながら回ることができた。広州駅が見え、地下商店街を抜けて地上に出るともの凄い人の波。駅舎への入場制限をしているようで、駅前広場は夥しい人の数。みんな大きな荷物を持っている。旧正月のための帰省だろうか？それには少し早い気がする。

駅の中に入ってみたいかったが、切符を持っていない人は入れないようだ。列車でどこかに行く予定を立てなくてよかった。駅のバスターミナルからマカオに行くことも考えたが、この雑踏でどのバスに乗ればいいのかとても分からない。人に訊けるような状況ではなく諦めた。広州は大会なので、ごく一部を覗きただけだったがとても活気のある街という印象。

四川料理店でマーボー豆腐とカニ料理、翌日はオコゲに海鮮の“あんかけ”と担担麺、広東料理店でホタテ、豚肉入り麺を食べた。やはり、本場中国の料理は辛さが強いがうまい。

言葉が通じないというのは本当に困る。身振り手振りで分かることには限界があり、単語だけでも、カタコトでも話せば全然違う。一般に、中国ではほとんど英語が通じないので、自分から中国語を話さなければ何も進まない。旅行中国語会話の本を持っていたが、正しい発音でないと通じないので、ほとんど役に立たなかった。

- ② 広州空港で両替した現地通貨の中にニセ札が混じっていた。買い物でそれを出すと、使えないと突っ返される。初め、なぜか分からなくて不思議に思っていたが、夕食に入ったレストランでニセ札ということが分かった。ニセ札の番号が当局から発表されていて、店にはそのリストがあり見せてくれた。その後、市内で買い物をした時も、お釣りにニセ札を掴まされた。

結局、帰国までに使えずに残った札は100元札3枚と、50元札2枚だった。これらは明らかにニセ札であり、損害としてはほぼ6,000円ということになった。



中山記念堂



廣州駅

許せないのは空港の両替である。何も分からない旅行者に、ニセ札を渡してよこすなど言語道断。中国の恥、国の信用を失う行為というべきだろう。

- ③ 中国南方航空で、広州から昆明に来た。昆明では宝善大酒店というホテルに宿泊、17階建ての高層ホテルで共用部の施設も充実していた。ホテルのマネージャーだけは何とか英語が通じた。
- ④ 雲南民族村は雲南省の少数民族をテーマにしたテーマパーク、傣賽 (Dai), 蔵族村 (Tibetan), 哈尼村 (Hani), 納西村 (Naxi), 白族村 (Bai) など、いろいろな少数民族のパビリオンがあり、民族の特徴を表した建築、展示を見ることができ興味深かった。

蔵族村ではバター茶を飲ませてもらった。テント小屋で3、4人が焚き火にあたっていたので、「お茶を下さい」と言ったら、実演して見せてくれた。筒でヤギ?の乳を攪拌してバターにして、塩と砂糖を少し加えて湯を注ぐ。バター茶は塩味だと思っていたが甘かった。熱湯で作ると思っていたが、ぬるかったので衛生的に少し気になった。

各民族村はそれぞれ趣向を凝らし、特に建物（パビリオン）の形に特徴があり面白い。納西族の村で、独特の文字（東巴文字^{トンパ}？）で書いた「幸福」と「愛」という文字を書いたペンダントを買った。

帰りのバスは満員、バスの中の顔を見るといろいろな顔がある。ほんとうに昆明には多くの民族が暮らしているんだなあと思う。バスは市街地の入り口から渋滞に巻き込まれ、往きに比べて2倍以上時間がかかった。バスの運転手は小太りの女性で、運転は一刻も気を抜けない。赤信号でも平気で道路を横断するし、車がひしめき合って車線の入替えが激しく、チョットでも気を抜くと接触事故になるのではないかと心配した。

- ⑤ 昆明で初めて「火鍋」を食べた。三江火鍋店に入った方がいいが、言葉が全く通じなくて何をどう頼めばいいか分からず困っていた。すると店員の一人が、日本語の分かる人を連れて来てくれた。「日本の方ですか?」「注文の仕方が分からなくて…」ということで、注文の仕方を教えてもらった。まずスープの味を決める。スープは2種類あり、ナベが真ん中で仕切られている。「辛いスープ」と「あっさり塩スープ」を選び、それと、肉、魚、野菜、豆腐など自分の好みで選ぶ。その方は親切に、自分の好みはこうです…というように、丁寧に教えて注文してくれた。彼は35~40歳くらいで昆明に来て1年、市内で洋菓子店を始めるのだと言っていた。昆明では、ほとんどの人は英語が分からず、中国語も雲南方言なのだという。その方とはほんの数分立ち話をしただけで、名前も訊かずただお礼を言って別れた。

彼は1階に客として来ていたところを、店員に呼ばれて来てくれたのだった。辛いスープ、あっさり塩スープに



納西族村



布朗族村



三江火鍋店

はいろいろな薬味、香辛料がふんだんに入っていて、辛い方のスープは本当に辛かったが、とても後味がいい。

昆明の冬は寒さが厳しいので、このような熱いナベ料理が人気あるようだ。食べ終わって店を出る頃は満員の客になっていた。寒さが一段と厳しくなっていたが、火鍋で温まった体にはその寒さが心地よい。火鍋店の店員は、私が会話帳を見て何か言おうすると、何人も集まってきて真剣に聞いてくれ親しみが湧いた。広州のレストランより庶民的で、店員一人ひとりが素朴で親切だった。店にはいろいろな顔があった。漢民族、チベット系、ウイグル系などは顔の様子でだいたい判別がつく。実際は、何種類もの民族が複雑に混血しているように思う。この火鍋店には、その後2回食べに行った。最後にはなじみの客のように歓迎され居心地よかった。



三江火鍋店

- ⑥ 昆明から日帰りツアーで石林に行って来た。ツアーメンバーは、北京から来た「王」さん夫婦、昆明で英語教師をしているというアメリカ人3人。英語教師をしながら各国を渡り歩いているとのこと。数ヶ月中国で暮らしているので、ある程度は中国語がわかる。Nick は日本に半年いたので日本語も少しできる。



石林

あと中国人2人連れと私の合計8名。石林は有名な景勝地だけに、壮大な石の林が延々と続きそのスケールの大きさは驚きの一言。天気にも恵まれ、メンバーとも意思疎通でき楽しい一日だった。

- ⑦ 昆明から麗江に行った。現地ガイド付きツアーをお願いしてあり、ガイドが空港に迎えに来てくれた。

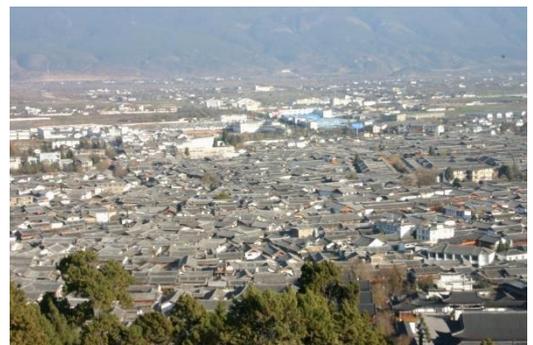
麗江はもともと^{ナシ}納西族の町だったが、1997年に世界遺産に登録されると、彼らは商売のために流入してきた人に家を貸し他の土地に移った。そのため、現在麗江に住む納西族は激減しているという。



麗江旧市街入り口

麗江旧街区にある多くの家が土産物屋に改装され、観光用に町を改造した感じで全く興ざめ。中国全土から多くの観光客が訪れるのだが、中国人はこんなのがいいのだろうか?と不思議に思う。

街区の道は狭く迷路のようで、地図がないと迷子になりそうだ。しばらく歩くと、ほぼ同じということがわかり、ライオン・ヒルという丘の上にある麗江古城に登った。頂上にある古城の最上階からの眺めがハイライト。密集した民家と、曲線的な形が特徴の屋根が延々と続いている。麗江旧街区のハイライトはこれだ



麗江古城から旧市街を望む

ったのか！と納得した。

夕食は麺料理。7, 8種類の具（ウズラの卵、ソーセージの輪切り、肉、魚の薄切りなど）と、茹でた麺を土鍋に入れ、アツアツの塩味スープで食べる。素朴な味で、スープと具が絶妙なバランスでとても美味しかった。寒さが厳しいこのあたりの料理は、油が多く味が濃い。

肉や野菜はこの地方のものらしく、体に良さそうだ。店の人に「この料理は何と言うのですか？」と会話帖を示すと『这是过桥米线』と書いてくれたが、残念ながら読むことができない。

⑧ 翌日、ガイドがミニバンをチャーターしてホテルに迎えに来てくれた。

まず、白沙村にある壁画を見に行く。壁画を納めた寺の屋根は独特な形で風格を感じる。壁画は中央の奥にあり、さらにその奥に黄金の仏の坐像が安置されていた。

壁画は写真撮影禁止で、係員が見張っていたが、ほんの数分いなくなったスキに内緒で写真を撮った。

次は東河という古都。ここは内戦で破壊され再建されたとのこと。ガイドは、麗江古城は地震の被害に遭ったが、建物が木造であったことが幸いして倒壊を免れたと説明。現在も古い建物が残っている。屋根の端部が上の方に弓形に反っているのは何故か？と訊くと、龍の形を真似たものだという。龍は幸運の象徴で、家に良いことが来るようにとの願いを込めているのだそうだ。

王龍山の寺、東巴王国テーマパークなど、ガイドが勧めてくれるが、ガイドの言う入場料は高すぎる。彼は入場料を横取りするのである。昨日、麗江古城の入場料をごまかされたことで分かった。

観光スポットが離れているため、この地方の荒漠とした景色を見ながら車はどんどん走る。せっかく来たのだから、多少の額なら目をつぶってもいいとは思いますが、、、こちらはガイド頼みだから、あまり争いたくない。質の悪いガイドに当たったということで我慢するしかなさそうだ。

麗江は世界遺産ということもあり、その保存のため入場料は高めの設定になっている。その入場料を倍以上ごまかされるのはいやだ。まあ、雲南省の村々をドライブしたと割り切ることにしよう。

麗江から200kmの範囲には自然の景勝地が多く、できれば行きたかったが事前の情報収集不足だった。ここからはチベットもそう遠くない。いつかチベットや新疆ウイグル自治区へも行ってみたい。この地域は文化的に独自のものがありとても興味深い

市内に戻り、ガイド、運転手と3人で昼食をとる。「火腿乌骨鸡」という雲南独特の料理で、大鍋に黒鶏（本当に黒い皮の鶏）を骨ごとぶつ切りして、頭や内臓すべて入っている。これを脂分の強い塩味のスープで、野菜などを加えて食べる。スープの味はとてもいいが、私には塩分が強すぎた。

麗江は世界遺産になったことで観光客が増えたが、納西族の人々にとって良かったのだろうか？多くの人流れ込み、住民の多くは追い出されてしまった。観光収入が増えるのはいいことだが、納西族の人々には十分な収入にならないのではないかと心配してしまう。少数民族の人々は、いつに



白沙壁画



壁にイラストされた東巴文字

なっても恵まれることがなく気の毒で仕方がない。

- ⑨ 昆明からベトナム・ハノイへは、1時間と少しのフライトでアツという間に着いてしまった。中国とは1時間の時差。ホテルは空港の紹介所で決めたが、実際に着いてみると思っていたより良くなかった。専属のボーイ君がいて少し生意気、礼儀作法などの教育も行き届いていない感じ。

ホテルの女主人が、滞在日数と照らし合わせてスケジュールを組んでくれた。

1日目 ニンビンの日帰りツアー。帰って夜ホテルを出発して夜行寝台列車で北部のサパへ

2日目 早朝5時半、サパ着。サパ観光

3日目 サパ観光、20時夜行寝台でハノイへ

4日目 早朝5時半ハノイ着。仮眠後、8時半にハロン湾ツアー

以上、すべて含み310ドル、厄介に思っていたツアーの予約が全て終わった。かなりハードスケジュールだが、日数の関係でやむおえない。

- ⑩ 1日目 出発の朝、1階の小さな食事室に降りると、初老の夫婦がいた。話しかけたところ、フランス人の夫婦だった。ご主人は英語を話し、フランス語で奥さんに通訳する。奥さんがスペイン顔なので、もしやスペイン人？と思えばスペイン語で話しかけるとバレンシアの生まれとのこと。それからはスペイン語で話が弾んだ。彼らは1ヶ月間も旅しているようで、とても羨ましい。

ニンビン (Ninh Binh) のツアーは、旧王朝の古寺院を見て昼食。目的地のタム・コックはカルスト地形で桂林のような風景が広がっている。そこで、2人ずつペアーになりボートで約2時間、雄大な景色を楽しみながら水郷を漂う。

私の同乗者はリトアニア生まれ、コンサルタント会社に勤めているとのこと。最初彼はヨーロッパの小国と聞いていたが、リトアニア人ということが分かり、現在はウラジオストクに住んでいるそうだ。英語が堪能で、最初は英語圏の人と思ったほどだ。世界中を渡り歩いて仕事しているとのこと、英語が上手いのも頷ける。本当にグローバルな人だなあと思う。



タム・コックの水郷

- ⑪ ニンビンのツアーから戻り、シャワーを浴びてすぐ次のツアー。夜行列車でベトナム北部のサパに向かう。例のボーイ君がタクシーに同乗し、駅に着くと列車の席まで案内してくれた。確かに、勝手の分からないベトナムで切符を買い、寝台列車の指定位置にたどり着くのは難しい。

ラオ・カイ駅には5時半ころ着いた。乗車時間8時間。改札口でプレート掲げた迎えの人を探したが、どうしても見つからない。次の列車が到着してもまだ見つからず、見かねた別の迎えの女性が助けてくれた。彼女はハノイのホテルに連絡し、私の泊まるホテルがサミットホテルだということ調べてくれた。ホテルの女主人の“ラオ・カイ駅に迎えが来ているから大丈夫”という言葉信じて、ホテルの名前すら確認していなかった。ガイドが待っていてくれると思い込んでいたが、迎えのマイクロバスを自分で見つけて乗らなければならなかったようだ。

「駅まで迎えに来ている」というのは辻褄が合っていて、必ずしも判りやすいように待っていてくれる、ということではない。それでもかなり不親切、それならそうと教えてくれなければ旅行者が迷うのは当然。この女主人のホテルは万事こんな風だった。相手の言葉の意味合いを柔軟に捉える、それも危険側に捉える必要があるということ学んだ。

⑫ サパツアー1日目、サミットホテルに到着。

朝食後、9時に現地ガイドが迎えに来た。ガイドは小柄でガッチリした体格の女性。今日のコースは、近くのモン族の村とカットカット村を巡る、2キロほどの軽い山歩きといったところ。

歩きながらの話、彼女は26歳で1歳と6ヶ月の子の母親。彼女がガイドをしている間は、夫が子供の面倒を見て食事を作る。彼女はガイドで毎日何キロも歩くそうだ。山道を7キロ歩いてホテルまで来て、ガイドで数キロのコースを歩き、また7キロ歩いて家に戻る。

ここは中国国境に近いベトナム北部山岳地帯、道はアップダウンの激しい石ころだらけの山道で、勿論舗装されていない。山岳民族は貧しく車を持ってないので、歩くことは日常生活そのもの、村人はみな健脚の持ち主だ。英語を流暢に話すので「どこで習ったの？」と訊くと、ツーリストから習うのだという。観光客を案内しながら、見よう見まねで実地に覚えたとのこと。的確な表現で、充分通じる英語である。マア、案内するところは決まっているし、旅行者との話もだいたい似通った話題なのだろう。こちらの質問にも的確な表現で答えてくれた。とても賢く、その逞しさに感心させられた。歩いていると、水牛の群れや巨大な黒ブタがいて、そのまわりに可愛い赤チャンブタが乳に群がっていたり、のどかなものだ。

ホテルから歩いて4,5分のマーケットを覗いてみた。観光客相手というより、地元の人が生活に必要なものを買う市場。野菜や果物、肉(鶏,牛,羊,豚など),魚(川魚,コイ,ニジマスなど),日用品,薬草などが売られている。生きている動物をその場で捌いて売っているの、とても新鮮。市場にはモン族かザイ族か、山岳少数民族が黒地に鮮やかな刺繍の民族衣装を着て、大きなカゴを背負って集まっている。



2キロの山歩き



サパのマーケット

⑬ サパツアー2日目、12キロのトレッキング。午前中ラオ・カイ村、午後はタ・バン村に行く。

午前中の7キロはかなりの悪路、しかもアップダウンが激しかった。田の畦道のような、狭くてゴツゴツした岩の飛び出た坂道に行く。遙か彼方、谷底に見えた川の畔まで下り、川に沿って歩く。吊り橋があり川を渡る。川は雪解け水か、水量が多く急流でマス類がいそうな川だ。再び畦道、石がたくさん顔を出し、所々水溜りがあり滑りやすい。バランスを崩すとカメラもろとも水田に落ちそう。空は快晴、遠く4000メートル級の峰々が薄っすらと見え隠れする。

約2時間のトレッキングの後、昼食。

午後の5キロは、比較的平坦な田舎道をゆっくり歩く。途中、他のグループと抜きつ抜かれつしながら挨拶を交わしながら歩く。



12キロのトレッキング(下の川まで下りていく)

途中ガイドの生まれた家に立ち寄る。お母さんに挨拶、今は両親と下の兄弟が住んでいる。家は昔の日本の農家という感じ。居間兼食事室の床は土間で、光がほとんど入らないので真っ暗。明り取りがある部屋にはミシンが置かれていた。電気はガイシで引かれている。

日本人からすると、とても住めるとは思えないような、江戸時代の農家といった感じの家。家の周りには、ニワトリや黒ブタが放し飼いされ、黒ブタのしぐさはユーモラスで可愛い。

彼女は、旧正月に着る新しい服の一部が出来上がったので、それを取りに来たのだった。母親に頼んでおいたのだろう。30分ほどでまた歩き始める。のどかな道をさらに行くと吊り橋があり、そこがトレッキングの終点、一番乗りだった。

皆の到着を待つ間、何人かのガイドさんと雑談する。みんな若い女性ばかり。この女性は働き者で、みな屈託なくよく話す。しきりと携帯で連絡を取っている。

ベトナム北部山岳地帯のこんなところまで、携帯電話が普及しているのには驚いた。ただ、一般の村人は携帯にはほとんど縁がなく、ガイドは仕事の必要から持っている。何人かのガイドを比べてみると、私のガイドは明るく利発、堅実な頑張り屋さんという印象。ここに生きる人々は、自然環境、経済環境が厳しい土地で、精一杯がんばって自分たちの生活を守っている。この地の人々に、よりよい教育を与え、もっと豊かな生活ができる日が来るようお願いしたい気持ちだ。

- ⑭ 夜行列車でサパツアーからハノイのホテルに戻ったのが朝6時、食事して一息つく暇もなく、ハロン湾ツアーの出発時刻になってしまった。

ツアーは総勢14人。走り始めると、フランス軍が造ったという大きな橋を渡り、高速道路に入る。途中、ドンホー村の版画、バッチャン村の陶器などを見る。走ること1時間、特徴のある岩山が海の方に見え隠れするようになり、ハロン湾クルーズ船の乗り場に着いた。船着場には夥しい数のクルーズ船が停泊していて、そのなかの1つに乗り込む。

ハロン湾は石灰岩の岩が波の浸食によって削られた奇景で、松島の大型版といったところ。面積は広大で、今回のように5時間程度のクルーズではそのごく一部を見るに過ぎない。

沖に向かって進むと、遠く海に聳え立つ奇岩が見え、徐々に大きくなってくる。岩山が二重、三重に重なったシルエットなど、景色は変化に富み飽きることがない。

島に下船し鍾乳洞を巡ったり、カヤックに乗ったりアクティビティもある。太陽が西に傾くと、島に光が当たり逆光のシルエットが何とも美しい。太陽の光を浴び、爽やかな風を受けながら2時間のクルーズを満喫した。



かなりの悪路



屋食休憩所



クルーズ船

⑮ 今回の旅では多くの国の人とめぐり逢うことができた。

中国人、ベトナム人、オーストラリア人、ドイツ人、オーストリア人、リトアニア人、ベルギー人、フランス人、スペイン人、イタリア人、アイルランド人、スウェーデン人、アメリカ人、イギリス人、シンガポール人、韓国人、中国少数民族、ベトナム少数民族など、多種多様な人々と触れ合う機会を持った。すべて自分で計画し、航空券やホテルの手配など自ら行った。中国語が全く話せないのも、何をすることも言葉が通じず苦労し、いろいろ不安な思いもしたが、そういうことがあるからこそ印象深い旅になったのだと思う。日本出発のツアーだと、同行者と慣れた日本語で話し、いろいろな国の人々と触れ合わない。せっかく海外に行くのだから、景色や料理ばかりでなく、世界中の人と触れ合うことで、より楽しい旅になるのではないだろうか？



ハロン湾の奇景

今回も多くの人に接し、本当に楽しい時間を過ごすことができ、そして無事に帰って来れたことに感謝したい。

(22) セベリア滞在[2009. 02. 12~03. 27]

2009年1月31日に会社を定年退職した。仕事を再開する4月までの2ヶ月間は、自分のためのリフレッシュ期間とし、セベリア市内にアパートを借りて1ヶ月半滞在した。

この滞在の記録については、別掲「セベリア滞在記」参照→[「セベリア滞在記」](#)

(23) タイ・マレーシア[2013. 02. 13~02. 24]

定年退職後4年間働き、年金受給年齢64歳になった、2013年1月末で完全に仕事を辞めた。これからは、自分のために使える時間が大幅に増え、旅行についてもこれまでと違い、時間に縛られない旅ができる。今回は、鉄道でタイからマレーシアまで、マレー半島縦断の旅に出た。

時間の制約がないので、移動しながら柔軟に計画を変えることができる。滞在日数も必要に応じて増減できるのがいい。サラリーマン時代からこのような旅に憧れていた。

今回は、鉄道でタイからマレーシア方面に南下するという大雑把な計画で出発した。

① 出発地はバンコク、前回来たのはもう14、5年も前になる。空港そのものが変わっていた。バンコク到着が夜遅かったのも、急いでタクシーでホテルへ向かう。ホテルはスクンビット通りから少し入った住宅地の中にあり、場所が分らず運転手が20分ほどかけてやっと探してくれた。インターネットで予約したホテルである。

翌朝、BTS（高架鉄道）とMRT（地下鉄）を乗り継いで、タイ国鉄ホアランポン駅へ。すぐに Hat Yai（ハジャイ）行き寝台車のチケットを買う。エアコン付はなかった。どのくらい暑いか想像できないが、寝られればいい。

その後、駅近くの Wat Maha（ワット マハ）を見て、



ホアランポン駅

BTS, MRTとタクシーを使いサイアムスクエア周辺などバンコク市内を見て歩く。ナショナル・スタジアム駅でシーロム・ラインに乗り、1駅行ってサイアム駅で乗り換えてスクンビット・ラインで Ekkamai (エカマイ) という、ホテルの最寄り駅まで戻って来た。

ここからホテルまでは酷暑の中を歩いて10分ほど。とにかく暑い、シャワーを浴び一休み。

フロントで、カニ料理の食べられるレストランはどこにあるのか訊く。すると意外にも、エカマイ駅のショッピングセンターの中にあるという。ショッピングセンターは“Gate Way Ekkamai”といいほとんど日系の店舗で占められていた。市の中心から少し離れたエリアを再開発して、大型ショッピングセンターを作った感じ。1, 2階は日本の和洋飲食店のチェーン店が入居、タイには多くの日系飲食店が進出している。館内を回って毛ガニやタラバは見つけたが、上海ガニのような南方系のカニが

食べられそうな店が見つからない。インフォメーションで身振り手振り、何とか“タイで捕れるカニが食べたい”と伝えた。一生懸命に調べてくれ、「新興菜館」というレストランにあると教えてくれた。新興菜館は中華・タイ料理レストランで、思っていた通りのカニがあった。

タイでは是非このカニを食べたいと思っていた。カニは巨大、凄いボリュームで大皿に載せられ、カニ玉スープに本体が浮かんでいるといった感じで、見た目も豪華。味も最高、十二分に料理を堪能した。



ワット・マハ



南方ガニ料理

- ② 15:35分発のタイ国鉄で、タイ南部最大の都市 Hat Yai (ハジャイ) まで行く。ハジャイには翌日の9:15分に到着。ハジャイからは西ルートと東ルートの2通りあり、一般的なのはマレーシア西海岸沿いに行く、ペナン島など観光地が多い西ルートである。タイ国鉄がマレーシアのバターワースというところまで寝台列車を運行しており、このルートを行くとパダンブサールという町で国境を越えることになる。しかしこのルートは、インターネットで予約できることもあって人気が高く、予約が取りにくい。ハジャイでのチケットの取れ具合にもよるが、今のところ東ルートで行こうと考えている。

東ルートは、ハジャイからスンガイ・コロクというタイ最南端の町まで行き、そこから歩いて国境を越えマレーシアのランタウ・パンジャンという町に入る。そこからバスでパシール・マスという鉄道駅まで行けば、マレーシア鉄道の寝台急行でシンガポールまで行くことができる。問題はパシール・マス駅での接続待ち時間だ。マレーシア鉄道の便数が極端に少ないのである。パシール・マスからは、シンガポールまで行く「ティムール急行」と、途中のグマスという駅から北上してクアラルンプールまで行く「ワウ急行」が運行している。いずれもマレー半島を斜めに縦断しながら南下する。

時間は充分あるので、ハジャイで一泊して情報収集して東ルートを行ってみよう。ハジャイからスンガイ・コロクの間は多分急行はなく、鈍行で行くことになるだろう。この間約300kmあるので5, 6時間かそれ以上かかるかも知れない。

今回は、列車でバンコクからハジャイまでは行くことは決めていたが、その先は決めてない。行った先の状況によりいろいろな選択肢があるので、行って見て決めるというのが楽しい。

列車は約10分遅れで出発。バンコク市内はごくスローで進む。寝台車は最後尾に13号車1両のみで、しばらくガラガラ。ちょうど通路を隔て反対側が日本人の青年だった。

彼は東京農大の2年生で、将来商社に入り農業ビジネスをしたいという。今年夏から、交換留学生としてマレーシア・クアラルンプールの大学に1年間留学するというのだ。

列車はバンコク郊外を抜け、時々大きな町に停車しながら、徐々にスピードを増して進んでいく。彼の前の席にはチワワを連れたタイ人女性。暫らくすると私の前にもタイ人の30歳くらいの女性が乗ってきた。言葉が全く通じないので、面と向かっているが話すことができない。

暗くなり気温も少し下がり、係員が2段ベッドのメイキングをしてくれる。下段の人が窓を閉めてしまうと、風が入らずエアコンなしの車両は暑くて仕方ない。頼りの扇風機は首振り式で、アームの軋む音が赤ん坊の泣き声のようで気になる。昨夜充分眠ったせいか、暑さのせいか寝付けない。

外が明るくなり Surat Thani (スラータニ) 駅に到着。時刻表では03:45分着になっていたが、すでに7:30分。この時点でもう3時間45分の遅れ。これで4時間以上の遅れは決定的になった。

このあたりから、タイ人乗客は駅に停車するたびにパラパラと降りていく。

農大生と向かい合わせに坐り、しばらく話しながら行く。ひっきりなしに回ってくる車内販売で朝食を買った。結局列車は、予定より4時間15分遅れてハジャイに到着。4時間も列車が遅れたら日本では大変なことだが、タイでは別にどうということはない。文句を言う人は誰もいない。

彼はこれからバスに乗って、クアラルンプール方面に向かうと言う。握手をして、お互いの無事を祈って別れた。

③ ハジャイ・セントラル・ホテルに宿泊。

大きなベッドの部屋だが、水周りが老朽化していて水漏れが問題。すぐにシャワーを浴び昼食に出る。

フロントで教えてもらった「広東菜館」で昼食。昼食後、中心街をブラブラ行くと、新鮮な魚介類を並べた店がいくつもあった。ハジャイは魚介類の集散地のようだ。一旦ホテルに戻り一休み、再び街に出る。

ハジャイはバンコクのように大型デパートもあり、多くの若者でにぎわっている。

中央大通りの歩道半分ほどを占領して露店が並ぶ。さらに内側はくもの巣のように店がひしめいている。

店頭で魚介類を並べた店を見つけ入る。車えばは鉄板焼き、ハマグリは酒蒸しで新鮮な魚介を堪能、日が暮れた街をのんびり歩いて帰ってきた。

この街の中心はさほど広くなく、歩いて充分回ることができることがわかった。

④ ハジャイ 6:30分 始発スンガイ・コロク行き普通列車に乗る。停車駅ごとに徐々に乗客が増える。マレーシア国境に近いせいか、女性はイスラム教徒独特のフードを被っている。タイ南部はイ



ハジャイ駅



ハジャイ市内

スラム教徒も多いようだ。

列車は10:15分、スンガイ・コロクに到着。

ガイドブックによれば、歩いて国境を越えるという。どうなるのだろう？と不安に思っていると、やはり何となく予想はしていたが、オートバイに乗せて国境を越え、出入国の手続きをサポートしてくれる人が大勢待ち受けていた。駅から500メートルほどにあるタイ出国審査で、あの窓口に行ってパスポートにスタンプ印をもらって来い（これでタイの出国完了）、またオートバイで300メートルほどのマレーシア入国審査で、オートバイに乗ったままパスポートを渡すと、すぐにスタンプをくれた。

何と！10分ほどであっけなくタイ・マレーシアの国境を越えることができた。

オートバイのおじさんは、クアラルンプール行き長距離バス乗り場に連れて来て、クアラルンプールに行くんだろうとばかりに、ここでバスに乗れと言う。マテマテ、俺はコタ・バルに行くんだと言うと、少し戻ってコタ・バル行きの路線バスの停留所で降ろし、ここでバスを待てという。

これで100パーツ。勝手のわからない旅行者が、言葉も話せずに国境を越えるのは本当に大変、旅行者にとって有り難いし、オートバイのおじさんにとっても割のいい商売と思う。

どこか国境の表示のあるところで写真を撮りたかったが、オートバイであつと言う間に越えてしまったので、それができなくて残念。この国境越えでは通貨を交換するところがなく、マレーシアの通貨を持たずに入国。バスは約1時間でコタ・バルのバスターミナル到着。マレーシアの道路はタイに比べ整備されているように感じた。

コタ・バルでは、イスラム博物館、イスラム・モスク、王宮、イスタナ・ジャハート、イスタナ・バトゥ（王室関係の博物館）などを見て歩いた。

旅行会社で、鉄道の予約ができるか？列車の時刻表はあるか？と訊くが、やはりだめだった。コタ・バルは鉄道が通っていない。インフォメーションで訊くと親切に調べてくれた。特にすることもなさそうで、5、6人も集まって電話で訊いてくれたり、インターネットで調べてくれたりしたが、結局駅に行かなければだめだということがわかった。

Wakaf Baru（ワカ・バル）という最寄り駅に行き、直接そこで切符を予約しなさいとのことでタクシーを呼んでくれた。

事前調査では、Pasir Mas（パシール・マス）という駅から乗るようになっていたが、コタ・バルからならパシール・マスより、ワカ・バルの方が近いという。



海鮮レストラン店頭



タイ南部 イスラム教徒が多い



王宮博物館 関連施設入口ゲート

タクシーでパシール・マス駅に行くと窓口は閉まっている。今食事中でもうすぐオープンするとのこと。いたってのん気なものだ。今回の旅はあまり時間の制約がないので、何があっても慌てる必要がない。

時刻表があったので確認すると、ティムール急行はワカ・バル7：10分発/ジョホール・バル着20：58分と20：47分発/9：55分着ということがわかった。

やっと窓口が開いて訊くと、何と！ティムール急行は満席だという。それでは、行き先を変更してワウ急行（クアラルンプール行き）は？と訊くと、これも満席だという。しかもどちらも明後日まで。ちょうど今は春節（旧正月）の時期で、中国系住民が大移動するため全て満席なのだそう。せっかくタクシーで駅まで来たのに残念！各駅停車を乗り継いでジョホール・バルまで行く手もあるが、それなら明日切符を買っても良い。もう鉄道にこだわらず、飛行機やバスに切り替えて行くことにして、一旦ホテルに戻る。

戻る途中、中華レストランに入る。マレーシアはイスラム教国だからアルコールは禁止。このレストランにもアルコールは置いてなかった。せっかくの料理にビールがないのは残念、これから先が思い遣られる。帰りにセブンイレブンに寄ってミネラルウォーターを買うが、ここでもアルコール類は一切置いてない。

- ⑤ いろいろ考え、コタ・バルからは飛行機でクアラルンプールまで行くことにした。鉄道で行くこともできるが、列車本数や接続のことなどを考えると、移動に多くの時間をとられ過ぎてしまうためである。

コタ・バル空港はローカル空港、飛行場には一機も確認することができなかった。早速チケットカウンターに行きチケットを入手する。チケット売場にパソコンがあったので、使ってよいかと係員に訊くとOK！マレーシア航空のトップ画面からインターネット・エクスプローラーに入り、Google画面から検索したら日本語で検索できた。Web Mailに切り替えると、受信メールを全て日本語で読むことができる。国際化委員会の最終報告書に対する、経産省からの修正意見が来ていた。中をチラッと見たが、「経産省や国への要望」と取れるニュアンスの表現は改めて欲しいという内容。そんなことは中間報告書のときに言うべきだろう。報告書はこれまで過去何年間も、ほぼ同様の表現で作成されている。事務局には、修正は2月24日以降になることをメールした。

マレーシア航空の窓口の人から、その端末は航空券予約用専用端末だから、そろそろ終わりにして欲しいと言われてしまった。この時点で1時間近く経ち、メールのチェックも返信も終わっていたので礼を言って終了。別に混雑していたわけではないので、大目に見てくれたようだ。

少し気になるのは、最終報告書の修正期限である。至急となっていたので急ぎであることは間違いないのだが、だいたいいつも至急なので少し反発したくなる。最終段階で、このような基本的な修正を言ってくる経産省も何とかならないものか？

飛行機は約40分遅れで出発、クアラルンプールには14時頃到着。天気は快晴で、飛行中は熱帯特有の景色が見られた。帰りはクアラルンプールからのフライトになるので、空港にいるうちにチケットを手に入れておきたい。インフォメーションで訊くと、クアラルンプール→バンコクの午後便は、15：15（マレーシア航空）、18：05（マレーシア航空）、21：00（タイ航空）、



イスラム教博物館

21:10 (ルフトハンザ), 21:55 (マレーシア航空) であった。

バンコク→東京便が23:55分発なので、遅延を考えると余裕のある18:05分発が最善だろう。前日にバンコクに入っておくという手もあるが、空港からホテル往復の交通費がばかにならないし時間も無駄だ。初日に会えなかった大学時代の友人に会えるかもしれないが、確実とはいえない。18:05分発マレーシア航空の便に決める。

チケットが入手できたので、バスでマラッカに向かう。バスのチケットは事前購入制で、それを知らなかったため、結局16:00発には乗れず18:30分発になってしまった。

バスはほとんど高速道路を走り、ちょうど2時間でマラッカに着いた。20:30分着。

バスターミナルからはタクシーで市の中心部に向かう。ホテルは奮発して、HATTEN HOTEL という20階建ての超近的なホテル。これまでのホテルとは格段の差。部屋は広くベッドも大きい。前室のソファも立派、ライティングデスクも大きくてよい。ただしバスタブがないのが難点だ。これだけのホテルでもシャワーしかないということは、マレーシアでは高級ホテルでもバスがないのが一般的なのだろう。日本人としては、湯船にお湯を満たしゆったりと浸かりたいところだが。

- ⑥ マラッカに滞在。ホテルの宿泊者は西欧人、チャイニーズ系、マレー系など多彩。料理は洋食、中華が中心でマレー料理もある。ジュースはオレンジ、マンゴー、グアバなどトロピカルフルーツオンパレードで思う存分食べる。

旧市街のモニュメント、オランダ総領事館記念館、サンチアゴ砦、建築博物館などを見る。サンチアゴ砦には、石で造られた何種類もの凝ったデザインの紋章が飾られている。砦の岩肌は古い石積みが残っているが、そのすぐ横に真っ白で真新しい鐘楼があつて興ざめだった。

日本なら、新しく建て直しても見掛けは古くなるように工夫して、隣の砦との調和を考えたいと思う。歴史的な建造物や史跡をリアルに残すのは難しい。マラッカ川に面して、大型の帆船を模した「海の博物館」がある。川の対岸には高級マンションが建ち並んでいる。マラッカは日本でいえば長崎のような感じの街だ。

ホテルを出て海の方に歩き、マラッカ川の下流に懸かる橋を渡る。橋は500メートルもあり、橋の上からマラッカ海峡の写真を撮ることができた。

チャイナタウンは、ほとんどがみやげ物店で、時々レストラン等がある。今は春節の時期なので、それにまつわる飾りが煌びやかである。チャイナタウンは、行けども行けども同じようなみやげ物店で、あまり興味が湧かない。

ホテルに戻る前に「古城鶏飯粒」という、庶民的な中華料理店に入り昼食。時刻は既に午後3時だった。豆腐とトマトのスープ、ほうれん草のような野菜の炒めを注文。飲み物は？と訊かれ、ダメもとでビールと言う。すると「何ビール？」と来た。即タイガービールと反射的に返す。チャイニーズ系は、マレー人と関係なくビールはOKのようだ。カラカラの喉に、久しぶりのビールは美味しい！。



ホテル エントランス・ロビー



マラッカ市内

ビールを売っている店が分らないので、ここでビールを2缶買ってホテルに持って帰る。

⑦ マラッカからバスでクアラルンプールに戻る。

クアラルンプールのバスターミナルからは、連絡用の鉄道が都心まで運行されとても便利。

都心の **Bukit Bintang** (ブキ・ビンタン) で、中国系の経営するホテルに宿泊、市内を見て回る。

まず、モノレールでKLセントラルまで行き、モスク、国立博物館、バタフライ・パークを見る。地図を見ると、直線距離はあまりないのだが、歩行者を考えた道路になっていない。首都高速のような自動車専用道路が多く、歩いてはとても目的地にたどり着くことができない。

マレーシア国鉄のKLセントラル駅まで歩き、国立博物館がもうすぐそこ、というところまで来ているはずだが通ずる道がない。歩行者は無視され、車の通行に便利のように道路が造られている。

暑くて汗が止まらないので、タクシーでバタフライ・パークに行く。蝶が好きなので是非見たいと思っていた。

バタフライ・パークは、目と鼻の先だと思っていたのだが、また自動車専用道路に入り、インターチェンジを2回ほど通って、延々と遠回りをして辿り着いた。

バタフライ・パークは文字通り蝶の公園、巨大な網で囲った大空間に熱帯植物とマレーシアの蝶が無数に放たれている。迷路のような回遊路が作られ、所々に蝶の好む花や果物の切片が置いてある。そこで蝶は蜜を吸うので、至近距離でチョウの生態をみることができる。

次に、国立博物館に行く。マレーシアの成り立ちや地勢、文化や生活、植民地支配時代などが展示された博物館で、展示物はみな立派なもの。説明はすべて現地語と英語なので、いちいち読んでいられない。植民地時代の苦難の歴史の中では、オランダ、イギリスの統治に対する戦いと、最後にほんの僅かだが日本軍に関する展示もあった。こういう展示を見ると心が悼み申し訳ない気持ちになる。

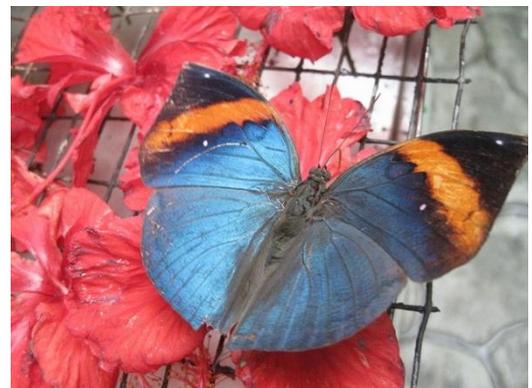
国立博物館から戻るのが一苦労。距離は近いのだが、ここでも歩行者の道路がない。猛スピードで走り抜ける車を縫って、道路を横断しなければならない。どのように歩けば目的地に着けるのかがわからず諦めて車に乗ると、また大きく迂回し、かなりの距離を走らないと着かないのである。



ホテルの部屋からマラッカ海峡を望む



マレーシア国鉄 KLセントラル駅



バタフライパーク



クアラルンプール市内の建物

市内を歩いていると、マレーシアが多民族国家だということが良く分る。マレー系、中国系、インド系が主だが、アラブ系の顔も時々見かける。そして、それらのハーフもいるだろう。だから建物も多種多様、近代的なビルの横に寺院風の先端が尖った瓦屋根があったり、色や形、デザインもさまざままで統一感がない。しかし、見ていて変化のあるところが逆に面白くもある。

それぞれの民族が、それぞれ独自の文化を主張しながら共存している。これでは国を治めるのが大変だろう。マレーシアにとって最も大きな課題は、民族間の融合ではないだろうか。

- ⑧ バドゥ洞窟に行った。ヒンドゥー教の神々が祀られているという洞窟。Batu Cave (バトゥ・ケイブ) 駅を出てすぐにある、ヒンドゥー教の神を祀っている祭壇のレベルまで上がった後、靴を脱ぐように注意されてしまった。その先に、洞穴に続く階段の参道がある。汗をかきかき、途中で休みながらやっと頂上にたどり着いた。

蒸し暑くて汗が止まらない。鍾乳洞のような迷路になっていると想像していたが、大きな洞穴が1つあり、そこに窪みを作って神々を祀っている。ヒンドゥー教の寺院は変わっていて珍しいのだが、実際にインドで何度か見ているので、私にとってそれほど珍しいというほどではなかった。

超高層ビル、ペトロナス・ツインタワーにも行った。以前は世界一のノッポビルだった。駅を出ると目の前にタワーが聳えている。

低層階は店舗で、伊勢丹も入っている。タワーの裏側には大きな池と噴水、池に面してカフェがあり、人々がのんびりとコーヒーを飲んでいる。

伊勢丹に入ってみると、地下は食品売り場で、日本の食料品が売られている。値段は驚くほど高く日本の2、3倍くらい。この国の物価からすると、一般の店と比べて8~10倍くらいの値段になると思われ、ターゲットは日本人の駐在員などが主だろう。しかし、実際に買い物をしている人々は日本人ばかりではなく、結構現地人も多い。一般のマレーシア庶民とはあまり縁のなさそうな、高級ショッピング・エリアだった。

バードパークにも行ってみた。園内は4つのゾーンに分れ、オオムやクジャク、大型の美しい鳥がたくさんいて、餌付けの場所では群れをなしている。

ペリカンに似た愛嬌のある鳥が、首を振りながらノロノロと歩く姿はユーモラスでトリッキー。大型のオオムの鳴き声はとても大きく、突然金切り声で鳴くのでドキッ!とさせられた。鳥たちは近づいても逃げることがなく、至近距離で写真を撮ることができる。

クジャクはファッションショーをしているようで、前から後ろから思う存分写真のモデルになってくれた。

バードパークでは童心に帰って楽しむことができた。



ヒンドゥー教の聖地 バトゥ・ケイブ



ペトロナス・ツインタワー



バードパーク

ホテルの隣にインドカレー店があり、通るたびに呼び込みに声を掛けられていたので一度入ってみようと思っていた。大きなステンレス容器にいろいろな種類のカレー（チキン、ビーフ、豆、野菜など）と米（チキンライス、辛いもの、甘いもの）が並べられ、自分の好みのものを好きなだけ取って食べる。タンドリーチキンが美味そうなので注文したいが、1匹まるまるは多すぎる。半分にしてほしいかと頼んだらOK、温めてくれた。カレーを食べながら待つと、皿に盛られたタンドリーチキンのぶつ切りが運ばれてきた。スパイシーで美味そう。しかし、カレーで満腹になってしまい帰ると言うと、店員は冷めていたので不満と思ったようだ。持ち帰りだから全然問題ないのだが、熱いのに交換するという。すでに少し食べていたのだが、それを下げて新しいチキンに野菜を添えて、パックに詰めて持たせてくれた。驚くほど親切な店員だった。

⑨ いよいよ旅も終わりに近づいた。わずか10日ほどなのに、随分長かったような気がする。

日本にいるのと違い、異次元の世界にいるような錯覚を起こす。こちらの気温は日本の夏である。この国の人々は、半ズボン半袖で1年中生活している。日本には四季があり、寒かったり暑かったり季節の移り変わりは当たり前だが、マレーシアにはそういう季節の変化はない。

マレー系、中国系、インド系や他の民族が1つの国に共存していることで、民族間の衝突は無いのだろうか？でも、異なった民族どうしが、談笑しながら歩いている姿をよく見かけるので、それほど違いを意識していないのかも知れない。道を歩いても電車に乗っても、実に多種多様な顔がある。勿論話し言葉はマレー語だと思うが、中国系の人々は中国語を使うし、テレビではいろいろな言葉でニュースを放送している。各民族の文化的な融合など興味の尽きない国である。

マレー半島を鉄道で縦断する予定だったが、春節の影響でマレーシア国内は鉄道での移動は叶わなかった。マレーシアとタイを比べると、隣国であっても随分違っていた。

タイにも中国系の人が多いが、タイはタイ人主体の国である。しかし、マレーシアは多民族国家で、国のあり方はかなり違う。物価はタイのほうがやや安いように感じた。ホテル、食べ物、タクシー、交通機関全般についてタイの方が安い。

今回モバイルを持ってこることができなかったが、ほとんどの旅行者はモバイルを持って移動しているのを見ると、今後は是非必要と思う。

食べ物について、私にとってはタイの方が合っていた。マレー系・インド系料理の割合が多いマレーシアより、中国系料理に近いタイの方が日本人の口に合っていると思う。マレーシアの料理は、カレーにマレーシア独特の小エビを発酵させ香辛料を加えた“サンバル”という調味料を使うためか、甘く私の口にはあまり合わなかった。カレーに甘い味がついてしまうのが残念だ。

文化的にはマレーシアの方により興味がある。この国の良さは何なのか、問題はどんなことがあるのか調べたら面白そうだ。多民族国家は、アメリカを代表格としていくつかあるが、何か共通するものがあるのか、それともそれぞれの国によって独特なのか、など興味がある。

最近急速に広まったモバイルは、タイでもマレーシアでも同じ。電車の中で、多くの人が携帯とにらめっこをしている姿は日本と同じ。このことで、人と人の直接コミュニケーションの機会が失われているのは大きな問題。携帯に依存しすぎて、人に頼らないという社会を造り出している。

時間に縛られず、ゆったりとした気分で旅することがいかに楽しいかを実感した。今回の旅でいくつかのポイントも分かったので、これからの旅に活かしていければと思う。

(24) 南米[2014. 02. 06~03. 06]

外国に行くには、まず体力が必要である。体力がなくなれば自然と気力もなくなる。一応の目安として、外国旅行は70歳くらいまでが限度ではないかと考えている。特に南米は日本から遠く、長期間の旅になるので体力が必要だ。これまで南米には2回行ったが、期間が短く大急ぎで回った感じで満足したとは言えない。最低でも期間は1ヶ月欲しいところだ。ところが仕事はなくても、1ヶ月日本を離れるのは結構難しい。自分の健康や経済的なことは別として、親や家族の健康、親戚の慶弔ごとなどである。特に高齢の親がいる場合、何かあった時日本にいないことは大きな問題である。

しかし、そう言っていては何もできない、万一の時は旅行を中断して、日本に戻って来るくらいの覚悟が必要だ。私は、今が南米に行く最後のチャンスと考え、妻の理解を得て1ヶ月間南米に行くことが叶った。これまでペルーには行ったことがなかったので、東京からリマへの往復チケットで行く。

それ以降は、予め行先を決めているわけではなく、初めての国ウルグアイと、そしてパタゴニアには是非行きたいと思っている。パタゴニアに行くとなると、向こうの季節は夏が望ましいので、冬に日本を出発することになる。諸々の予定を考え、出発は2月6日に決めた。結果的にルートは次のようになった。

東京→(アトランタ)→リマ(ペルー)→アレキープ(ペルー)^{バス}→タクナ(ペルー)^{バス}→アリカ(チリ)^{バス}→アントファガスタ(チリ)→サンチアゴ(チリ)^{バス}→メンドーサ(アルゼンチン)→ブエノスアイレス(アルゼンチン)→モンテビデオ(ウルグアイ)→ブエノスアイレス(アルゼンチン)→ウスアイア(アルゼンチン)→エル・カラファテ(アルゼンチン)^{バス}→プエルト・ナタレス(チリ)^{バス}→プンタ・アレナス(チリ)→サンチアゴ(チリ)→リマ(ペルー)→(アトランタ)→東京

この旅の記録については、別掲「南米の旅」参照 → [「南米の旅」](#)

(25) タイ[2017. 11. 29~12. 06]

2014年に1ヶ月間南米を旅したことで、海外旅行への熱も治まった。これまでのように行きたい気持ちがそれほど強くないのは、南米行きで満たされたためだろう。

この度、淳の“挙式”をタイで行うことになった。本人どうしがそう決めたのである。国内での挙式は、いろいろ気遣うことが多く大変。それぞれの家族だけで式を行うことになった。

タイ南部、バンコクから飛行機で1時間と少し、さらに車で1時間ほどのリゾートホテルに宿泊した。挙式と披露宴を身内だけで行い、とてもリラックスできて心から楽しかった。3泊4日のリゾート生活を満喫し、私たち夫婦はその後バンコクに2泊して帰ってきた。

旅のおもしろさは、未知の町や村を訪れ、五感で様々なことを体験できることである。行きたい場所に自分の思い描いた通りの方法で行く。限られた時間と費用でいかにそれを実現するか、その計画を立てることが楽しい。行った先で何が起こるか分からないので、場合によっては計画通り行かないこともある。そういったことが、より一層旅を思い出深いものにしてくれるし、そんな経験を積み重ねることで、様々なアクシデントにも対処できるようになる。私の旅のスタイルは基本的に一人旅、記録を残しているのでも、何年か経った後でもその時の記憶を蘇らせ、反芻できることだ。

海外旅行の思い出(1)、(2)、(3)はそんな記録の中から、思い出深いことを書き出してまとめたものである。(2021. 04. 27)